



お伽訓話

不思議の布呂敷

如 柳 子

昔或る處に金持で子供の好きな老翁がありました。時々近所の
 子供を集めて面白い話をしたり、又珍しい物を呉れたりしま
 した。その子供の中で一番老翁の気に入つたのは甘四郎と辛吉
 といふ二人の子供でありました。何故老翁の気に入つたかとい
 ふに、外の子供よりも老翁のお話を熱心に聞き、物を貰へば外
 の子供より餘計喜んだからでありました。

甘四郎といふ子供は大金持の子供で年は十一歳であります。辛
 吉といふ子供は貧乏人の子供で年は八つであります。此の二人
 の家は隣り合つて居りますから、身分は違ひますが、何時も中
 よく遊ぶのであります。併し甘四郎は年も上であり、家も金持
 ちでありますから、辛吉は自然に頭を下げて居るのであります。
 老翁も二人の家のことをよく知つて居て、辛吉は柔順で親に孝
 行であるといふことも、甘四郎は下女下男に侍かれて時々我儘

をいふといふこともよく知つて居るのであります。或る日老翁は常時の通りお話が済んでから、他の小供を皆歸して仕舞つて、甘四郎と辛吉ばかり残しました。二人の子供は老翁が如何するかと思つて居ると、老翁は二枚の布呂敷を持つて来て、二人に向つて言ふには

御前方二人は何時にも熱心にお話を聞くから今日は特別の御褒美を上げます。これは誠に面白い御褒美であります。併しこれを上げるに就て約束して置くことがある。この約束を守らなければ御褒美は何の役にも立たない。そこで第一此の御褒美は二人で取換へてはいけません。又他の人に見せてはいけません。それからこれは一年に一度、三年に三度しか遣ふことが出来ない。三度遣へばそれで此の布呂敷はなくなつて仕舞ふそれからこれを遣ふには、誰も見て居ない広い部屋の中で二三度振り廻はすのである。そうすると自分の好きなものが出て来る、大層面白い布呂敷だから、其の積りで大事にしなさい。だがこの布呂敷は一枚は錦の布だから大層高い立

派なもの、一枚は木棉の布で然も汚れて穴さへ穿いて居るのだから誰が貰つても否なもの、これを私が分けてやれば恨みつこが出来るから、じやんけんか鬨取りにじやう、じやんけんにしやうか、鬨にしやうか。

斯ういつて老翁はニコ／＼笑つて居ます。そうすると甘四郎はじやんけんがいゝといひました、辛吉は鬨がいゝといひまして、老翁さんも大層困つた様子でしたが

「じやんけんが、初めじやんけんをして、それから鬨をする、それで定りが付かなければ、私が決めてやる。」

そこで、二人共一生懸命、腕に力を入れてじやんけんをすると、甘四郎が紙で、辛吉が石、辛吉の負となりました。今度は鬨となりましたが、鬨も甘四郎の勝となつたので、甘四郎が先きに布呂敷を取ることになりました。

老翁さんは、どちらでもお前の好い方をお取りといふと、甘四郎は喜び勇んで錦の布呂敷を受取りました。辛吉の方は悄悄として汚穢布呂敷を受取

た。そして二人して有難うといつて各自家へ歸りました。
 切て家へ歸つてから、汚穢ない布呂敷を貰つた辛吉の方は戸棚の中へ仕舞つた切り久しく忘れて居ました、それも其の筈木棉の汚れた穴だらけな布呂敷ですもの、併し老翁の言つたことは本統だと思つて居ますから、辛吉が慾の多い子供なら、それを振つて見るのでせうが、慾が薄いものだからツヒ忘れて居ました。甘四郎は奇麗な花のやうな風呂敷なものですから、自分一人部屋へ這入つてソツト出しては眺めて喜んで居ます。併し甘四郎は慾が深いものですから、たつた三度しか振れないのですけれども、振つて見たくて仕方がありません。そこで或る日自分は立派な大きな家が欲しいと祈りながら、その錦の布呂敷を二三度振りましたら、自分の住んで居る家が、何時の間にか、今迄よりもズツト大きくなつて、三階も出来、藏も出来、西洋間も出来、天井はのこらず合天井でも出来、上は皆絨氈が敷いてあり、立派な油畫もあれは、銀の花活もあり、お庭まで廣々として、色々

うつくしい花の咲いた木も澤山あるのであります。甘四郎はこれは不思議だ、お父さんや、お母さんは何處に居らつしやるだろう、お竹やお松は何處に居るだらうと、方々のお座敷を駆け廻つて見ると奥の八疊の真中に黒檀で拵へた長火鉢の側に錦の布團を敷いて、お父さんもお母さんニコニコして坐つて入らつしやる、臺所の方へ行くと、お父さんは銀の釜で飯を焚いて居る。三疊の間でお松は自分の衣服を総つて居る、其の他書生部屋、車夫部屋、客間、離れ座敷、何處から何處まで奇麗つくめで、何から何まで揃つて居る。甘四郎は夢でも見た様な氣がした。今まで自分の家は中々立派だと自慢して居たのだが、それよりは十層倍も立派なのである、それから早速辛吉の家へ来て辛吉君僕は老翁さんから貰つた布呂敷を振りて大層立派な家を拵へたから早く見に来たまへ辛吉は往つて見て、甘四郎の驚ろいたよりも驚ろいた、それは辛吉は甘四郎の家を見てさへ、其の立派なのに見取れて居る位だから、こんな家を見れば眼を廻はさんばかりであつた。

そこで辛吉は自分の家が狭い／＼とお父さんがい
つもいふから、矢張り家が欲しい。サア自分も老
翁から貰つた布呂敷を振つて見たくなつて、匆々
家へ歸り前の布呂敷を出して、誰も見て居ないと
ころで、自分も好い家が欲しいと祈りながら、力
を入れて二三度振つて見たが、汚い布呂敷から塵
埃が立つばかりで、立派な家は愚か、瓦一つ出な
い、辛吉は落膽した。落膽したけれども、貧乏に
慣れた身だから左程悔みもしなかつた。

ところが不思議なことがある。學校で相撲を取る
のに何時もは同じ年のものにも負けた辛吉は、布
呂敷を振つた翌日は、同じ年のものを負かした、
これは面白いと思つて年上のものと相撲取つたが
これも負した、廿四郎とも取つてわけなく投げ出
した。それから十五位の肥つた方のある中學校の
生徒位のものもと相撲を取つて見たが、これもコロ
リと投げて仕舞つた。辛吉は何だか不思議に面白
くつて溜まらない、早速家に歸つて

「お父さん、私は力持ちになつたよ、相撲取ろ
うか、本氣になつて相撲取らないか」

辛吉のお父さんは初めに嘘言だと思つて相手にし
なかつたが、餘り五月蠅いふものだからそれじや
一つ取つて見やうといつて、辛吉と取組んだとこ
ろが、二三度ゆすつたかと思ふとお父はズデンド
ウと倒された、これは可笑しい怪我負だ最一度取
るといつて、お父さんは一生懸命になつたが、辛
吉の手が障つたかと思ふと倒されて仕舞つた。
さあこれから辛吉は力を出して見たくて仕方な
い、或る時は馬の倒れたのを起してやり、或る時
は電車の外れたのをレールに戻してやつたり、驚
ろくばかりの力が出たのである。

辛吉が力が出てから一月ばかりたつた頃、廿四
郎の後の家から火事が始まつた。廿四郎は餘り火
が側なのと、立派な家が焼けさうなのに、氣が狂
つて何一つ形付けることも出来ない、加之に直ぐ
に火が付く位で、手傳に來るものも間に合はない
一番先きに駆け付けたのが隣の辛吉であつたが、
辛吉は大入車二つ一度に兩手で引つ張つて來て一
度に箆筥五つ六つ長持三つ四つといふやうに擔いで
來て、これを大入車に積んで一度に二つの車を

引いて呉れたものだから半分程の道具は助かつた併し家は丸焼けになつて跡形もない。辛吉の家と甘四郎の家の間には廣い庭があつたから辛吉の家は焼けないで濟みました。甘四郎のお父さんは仕方がないものだから、前に居つた家よりも小さな家を立て、其の中に住むやうになつた。甘四郎は辛吉が恐ろしい力の出たのは全く老翁の布呂敷を振つた爲めだと覺りました。けれども取替へることの出来ぬ約束であるから、今更如何することも出来ない、大層後悔しました併し自分も力が出るやう祈つて布呂敷を振つたら屹度力が出ると思ひました。それから一年経つて翌年、例の通りソット一ト間で錦の布呂敷を振りましたが、こんどは自分の祈つたものは出ないで、自分の着て居る衣物が大層立派に變りました。自分の祈つたものでないから不平でありましたが、誰でも甘四郎に出逢ふものが、其の着物の立派なのを見て奇麗だ奇麗だと褒めるものだから、自然得意になつて此の着物さへあれば、人が大騒ぎやつて呉れるから、力がなくとも心配がないと自惚るやうに

なりました。辛吉は前にも言つた通り、元々慾のない子供でありますから、別段何が欲しいと思ふ譯ではありませんが、前に布呂敷の御蔭で力が出たのを喜んで居りましたから、甘四郎が二度目に布呂敷を振つた話を聞いて、自分も前の通り人の見ないところ、二三度例の様に布呂敷を振りましたが、前と同じ様に何も出て来ません。けれども、前にも何も出ないと思つたのに力が出たのでありますから今度も何か出るだらうと、其の験のある日待つて居ました。間もなく其の年の秋になりましたが辛吉は何日頃に暴風雨が起つて、自分の家の邊に洪水が出るといふことを自分に曉りましたから町中の人に之を知らせました。處が初は誰も本統にしなかつたのであります、辛吉は全く老翁から貰つた不思議の布呂敷を振つた爲めに、恐ろしい力持ちになつたのだから、其の證據に布呂敷を見せやうと思つたが、さて老翁の約束で人に見せることが出来ないで、困つて居りましたが、甘四郎は火事のとぎ辛吉に助けられた恩があるもので

すから、辛吉のいふことが本當だといふことを吹聴して歩きましたので、これは本統かも知れないといつて、町中の人が大勢かゝつて、川の土手を高く築き上げました。處が其の後辛吉のいつた日限に暴風雨が起つて川の水は、非常に殖えたので築き上げた土手を最少しで越しさうになつたのであります。それですから若し辛吉が前に此のことを知らせて呉れなかつたら町中は皆水の爲めに流されて仕舞つたのでありませう。さあそれから辛吉は何でも知つて居るから、分らないことがあつたら辛吉に聞くがよいといふことになりました。そこで毎日毎日辛吉のところへ何か聞きに来るものがある。病人のある家の人が来て、私のところの病人は死にませうか、助かりませうかと尋ねる辛吉は助かりますと答へた。すると其の病人は助かつた。子供の居なくなつた處の人が来て、私のところの子供が急に見えなくなりましたが、何處に居ますかといふと、これは山に隠れて居るといふので、其山を尋ねるとチャンと辛吉のいつた通り隠れて居た。辛吉は何でも知つてる、非常な智

慧が出た。此の様になつたのは全く布呂敷を振つ

た爲めだと思ひました。

廿四郎の方は奇麗な着物を見せびらかして喜んで居ましたが、或る晩盜賊が這入つて来て、其の大切な着物を盗んで往きました。翌日になつて、サ

ア大變と大騒ぎになつたのであります。すこしも分りませぬ。そこで何でも知つて居る辛吉に尋

ねるがよいと思ひまして、辛吉の處へ来て、

「僕の大切な着物が無くなつた、僕は智慧がない

から、捜すことは出来ない、君は屹度布呂敷の

か蔭で大層な智慧が出たのだらうから、君なら

屹度分る、分つたら君は力があるから其の盜賊

を捕へて呉れ玉へ

「それは氣の毒だ、併しその盜賊は今其の着物

を泥の中へ棄て、仕舞つてある。この盜賊は、

君の衣物が欲しいのではない、君の意張るのを

不平に思つて居るもの、したのだから、泥から

拾ひ出したところが、汚穢で役に立たない。

廿四郎は辛吉の言つたことが本當だと思ひましたから、悲しくなつてワット泣き出しました。辛吉

はいろ／＼、感めました。そして着物などは、火に
 焼け水に漬ると頼みにならないものである、家も
 其の通り火に遇ひ水に遇へば役に立たなくなるも
 のである、と教えました。

第三年目になつては甘四郎も大分覺つたと見えて
 布呂敷を振つて見やうといふ考も出ません、とこ
 ろが辛吉は智慧があるものですから、此の布呂敷
 を三度目に振つたならば如何なものが出るかとい
 ふことを自然に曉りました。それでこれを甘四郎
 の布呂敷と取替えてやりたいと思ひましたが、さ
 て約束ですから取替える譯にいけません、兎も角
 も後に甘四郎に教えてやらうと思ひまして、例の
 様に布呂敷を振りました、そして其の効験のある
 日待つて居たのですが、老爺のいつた通り、其
 の時切りボロ布呂敷は見えなくなりました。
 甘四郎は辛吉が三度布呂敷を振りて、布呂敷が消
 えてなくなつたことを聞きましたので、早速辛吉
 のところへ來まして

「君は今度は何が出たのだよ、君は非常な智慧が
 出て、何でも先きのことまで分るのだから、大

方布呂敷を振らない前から知つて居たのだらう
 一體何が出たのだよ。

「イヤこれは君に今言つても分らない、今に君の
 ところへ出たものがあると、自然に僕のところ
 へ出たものが分るのだよ

「ソレはいよ／＼不思議の布呂敷だぞ、そんなら
 僕が眼に布呂敷は何が出るか教えて呉れ玉え。
 「ソリヤ僕は布呂敷の御蔭でチャンと分つて居る
 が、君は僕にその出たものを自由にさせて呉れ

、ば言ふが、如何だへ
 甘四郎は暫く考へましたが、辛吉には恩があつて
 今は何事でも辛吉を兄のやうに思つて居るものだ
 から、決心して次の様に返事をしました

「ソリヤ君の自由に任せるよ、君は力だの智慧だ
 のといふ、焼けも沈みもせぬものを授かつたの
 だから、到底も適はないよ、向の自由に任せる
 から、出たものは君の勝手にし玉へ

「そうかそれじや、先づ早速君のところへ往つて
 布呂敷を振ることにしたいな。

「出たものが辛吉君の勝手とあれば、僕今聞いた

ところで面白くないナア、それぢや、是からいつて振らう

そこで二人して甘四郎の家へ行きました。素より一人で振らねばならない約束でありましたから、辛吉は甘四郎を部屋に入れて錦の布呂敷を振らせました。

ところが甘四郎は驚いた、ヤア大變々々といふので、辛吉も部屋に這入つて見ますと、部屋一杯金銀の小判であります。今のお金でいへば何拾萬圓といふので、甘四郎は喜んで、これさへあれば、何でも好きなものが買へるといふと、辛吉は約束だから僕の勝手にするといつて、それから其のお金を何でも正直で貧乏して居るものを探し出して與へることにしました。甘四郎も初めは少し不平な顔付きをしましたが、正直で貧乏な人が俄かに幸福を受けて喜ぶ有様を見て、非常に愉快を感じる様になり、これから辛吉と一所に、其のお金を施して歩くやうになりました。さてこれを讀んだ皆さん方、辛吉が三度目に布呂敷を振つて何が出たのだから分かりますわ。

(これでおしまひ)

我等の園生 (修身の歌の曲)

- 一、我等の園生に春來れば
鶯來鳴き蝶は舞ひ
赤や黄色や色々の
草木の花の花ざかり
- 二、我等の園生に夏來れば
緑の葉影そよくと
たもと涼しくもる共に
いざや遊ばん歌つゝ
- 三、我等の園生に秋來れば
黄菊白菊咲きみちて
高きみ空を風のまに
舞來る紅葉の三つ五つ
- 四、我等の園生に冬來ば
白雲降りつむ庭の面
燦めく朝日の美しく
はやも作らん雪だるま